



TITLE:

## 後腹膜海綿状血管腫の1例

AUTHOR(S):

高羽, 夏樹; 細見, 昌弘; 関井, 謙一郎; 中森, 繁; 伊藤, 喜一郎; 佐川, 史郎; 城戸, 哲夫; 佐谷, 稔; 川本, 誠一; 佐藤, 健司

---

CITATION:

高羽, 夏樹 ...[et al]. 後腹膜海綿状血管腫の1例. 泌尿器科紀要 1991, 37(7): 725-728

ISSUE DATE:

1991-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/117228>

RIGHT:

## 後腹膜海綿状血管腫の1例

大阪府立病院泌尿器科（主任：佐川史郎）

高羽 夏樹，細見 昌弘，関井謙一郎

中森 繁，伊藤喜一郎，佐川 史郎

大阪府立病院消化器一般外科（主任：佐谷 稔）

城戸 哲夫，佐谷 稔

大阪府立病院画像診断科（主任：佐藤健司）

川本 誠一，佐藤 健司

### RETROPERITONEAL CAVERNOUS HEMANGIOMA: A CASE REPORT

Natsuki Takaha, Masahiro Hosomi, Kenichiro Sekii,  
Shigeru Nakamori, Kiichiro Itoh and Shiro Sagawa

*From the Department of Urology, Osaka Prefectural Hospital*

Tetsuo Kido and Minoru Satani

*From the Department of Surgery, Osaka Prefectural Hospital*

Seiichi Kawamoto and Kenji Sato

*From the Department of Radiology, Osaka Prefectural Hospital*

A 55-year-old man was shot at the age of 50. At that time CT revealed a mass near the spleen. Thereafter, CT did not reveal any growth of the mass, but to examine the mass in detail he was hospitalized to our department. The mass was diagnosed as left adrenal cavernous hemangioma, since, on aortography, it was typical cavernous hemangioma and fed mainly from the left inferior phrenic artery. The mass was resected with the spleen, thoracic wall, and part of diaphragm. At the operation the left adrenal gland was identified to be intact. Histopathological diagnosis was retroperitoneal cavernous hemangioma.

This is the 19th case of retroperitoneal cavernous hemangioma in the Japanese literature.

(Acta Urol. Jpn. 37: 725-728, 1991)

**Key words:** Cavernous hemangioma, Retroperitoneal tumor

#### 緒 言

後腹膜腫瘍は比較的稀な疾患であり，その中でも血管腫の占める割合は非常に少ない．われわれは最近，後腹膜海綿状血管腫の1例を経験したので，若干の文献的考察を加え報告する．

#### 症 例

患者：55歳，男性

主訴：腹部腫瘍の精査・加療の目的

家族歴：特記すべきことなし

既往歴：37歳，肺結核にて入院，加療．54歳，慢性肝炎にて入院，加療．

現病歴：1985年7月15日被弾し弾丸摘除術施行．その際に腹部CTにて脾臓付近に腫瘍を指摘された．1988年腹部CTにて腫瘍の増大を指摘されなかったため経過観察していたが，1989年11月2日同腫瘍に対する精査の目的にて当科に入院．諸検査にて，左副腎海綿状血管腫と診断した．

入院時現症：身長 162 cm，体重 59.8 kg，血圧 120 / 84 mmHg．脈拍84/分，整．頭頸部，胸部理学的所見に異常を認めなかった．両上腕，前胸部，背部，大



Fig. 1. Ultrasonogram shows heterogeneous tumor ventrocranial to the left kidney.



Fig. 2. CT shows heterogeneous, low density mass adjacent to the spleen.

腿部に刺青を認めたが、体表に血管腫を認めなかった。腹部は平坦で圧痛はなく、腫瘤は触れなかった。腹部正中に手術瘢痕があった。

入院時検査：血沈 40 mm (1 時間)。検血，血液生化学，腫瘍マーカー，副腎皮質・髄質ホルモンに異常を認めなかった。

超音波検査：左腎腹側上方に径 10 cm の腫瘤を認め，内部は肝と同程度のエコーレベルで不均一であった。腫瘤と左腎の連続性はなく，左水腎症もなかった。

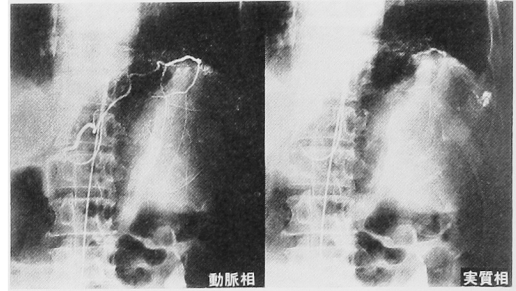


Fig. 3. Angiography of the left inferior phrenic artery. Cotton-like shadow is seen.

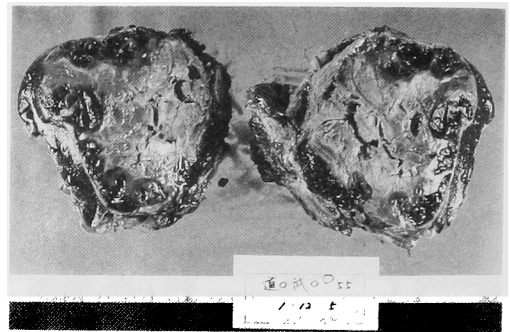


Fig. 4. Macroscopic appearance of the resected specimen.

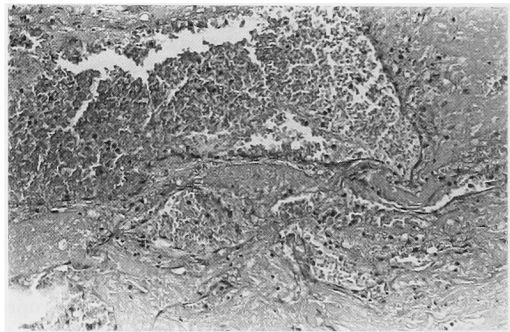


Fig. 5. Microscopic appearance of the resected specimen. Elastica Van Gieson stain  $\times 40$ .

(Fig. 1).

X線学的検査：IVP にては水腎，尿管はなかったが，左腎は腫瘤により下方へ圧排されていた。腹部 CT では，左後腹膜腔に 11×8 cm の low density，内部不均一，一部 enhance される腫瘤を認め脾臓を背側より圧排していた。enhanced CT では腫瘤と脾臓の境界は明瞭であり，左副腎は同定できなかった (Fig. 2)。腹腔動脈造影にて脾臓と重なる位置に tumor stain を認めた。選択的下横隔動脈造影では動脈

相から静脈相にかけて斑状の造影剤の pooling を認め、海綿状血管腫と考えられた (Fig. 3).

腫瘍の栄養血管が下横隔動脈より分岐していること、CT にて左副腎が認められないことより、左副腎原発の海綿状血管腫と診断した。

手術: 左腰部斜切開にて後腹膜腔に達したが、腫瘍と胸壁、横隔膜、脾臓との癒着が強かったため、経胸腔的、経腹腔的にも腫瘍に達し、第 8, 9, 10, 11 肋骨を切除し、胸壁、左横隔膜の約 1/2、脾臓を腫瘍と一塊にして摘除した。左副腎は腫瘍とは連続しておらず、肉眼的には正常であった。

摘除標本: 重量は合併摘除した脾臓、横隔膜、胸壁、肋骨を含め 800 g、大きさは 10×9×9 cm であった。腫瘍は球状で繊維性被膜で囲まれ周辺部では凝血塊状となり、中心部は赤白色調であった。腫瘍と脾臓は癒着していたが、鮮明な境界を有していた (Fig. 4)。

組織学的所見: 内に赤血球を認める比較的大きな血管腔とそれを囲む薄い壁を有する血管が認められ、その壁には内皮細胞、弾性繊維を認めた。中心部は血管構造に乏しく、フィブリンやその器質化を認め、以前に出血があったと考えられた。以上より後腹膜海綿状血管腫と診断した (Fig. 5)。

## 考 察

Pack ら<sup>1)</sup>によれば、後腹膜腫瘍は全腫瘍の 0.2% にすぎず、そのうち血管腫は本邦後腹膜腫瘍 1,104 報告例中 1.9% であり<sup>2)</sup>、非常に稀な疾患である。

後腹膜血管腫の病理組織学的分類としては、遠藤ら<sup>3)</sup>は、毛細血管性血管腫 (capillary hemangioma)、海綿状血管腫 (cavernous hemangioma)、静脈性血管腫 (venous hemangioma)、血管周皮細胞腫 (hemangiopericytoma)、血管内皮細胞腫 (hemangioendothelioma) の 5 型に分類している。これらのうち、前 3 者は良性と考えてよく、後 2 者は良性、悪性ともに存在する。頻度としては、血管周皮細胞腫がもっとも多く、海綿状血管腫がこれに次ぐ。自験例はわれわれが調べ得た限りでは本邦 19 例目の後腹膜海綿状血管腫である<sup>4)</sup> (Table 1)。

男女比は 11 : 8 で性差はない。年齢は生後 50 日から 73 歳までで、平均 44.5 歳である。

臨床症状は腹部腫瘤 (7 例, 37%)、腹部痛 (5 例, 26%)、腹部不快感 (3 例, 16%)、腹部膨満 (2 例, 11%) などの腫瘤圧迫による腹部症状がほとんどであり、跛行、頻尿、下肢痛、発熱が 1 例ずつ認められた。

Table 1. Cases of retroperitoneal cavernous hemangioma in the Japanese literature.

No.	年度	報告者	年齢	性別	臨床症状	術前診断	大 き さ	治 療
1	1940	林	42	男	回盲部腫瘤	後腹膜腫瘍	手拳大	腫瘍摘除術
2	1962	湯浅ら	34	女	腹部膨満 右季肋部圧痛	後腹膜腫瘍	10×7×6 cm	腫瘍摘除術
3	1963	森下ら	45	女	心窩部腫瘤	後腹膜腫瘍	12×11×42 cm, 390 g	腫瘍摘除術
4	1967	安井ら	50	男	右側腹部腫瘤	記載なし	10×7×7 cm, 28 g	腫瘍摘除術
5	1971	石橋ら	54	男	頻尿、残尿感	膀胱後部腫瘍	4×6×9 cm, 140 g	腫瘍摘除術
6	1971	原ら	39	女	上腹部膨満感 左上腹部腫瘤	記載なし	27×18×6 cm, 3,000 g	腫瘍摘除術 胃全摘、摘脾、脾尾部切断
7	1973	松岡ら	33	女	腹部腫瘤 (右下腹側腹部)	後腹膜腫瘍	13.4×11×8.2 cm, 410 g	腫瘍摘除術
8	1974	井口ら	53	女	右季肋部鈍痛	後腹膜腫瘍	14×12×10 cm	腫瘍摘除術
9	1975	佐藤ら	42	男	右下腹部腫瘤 右下腹・腰部鈍痛	記載なし	12×12.5×8 cm	腫瘍摘除術
10	1977	兼田ら	38	男	上腹部痛、発熱	肝嚢胞	記載なし	試験開腹
11	1978	荒瀬ら	53	女	右季肋部痛 右季肋部腫瘤	後腹膜腫瘍	14×12×10 cm, 980 g	腫瘍摘除術
12	1984	阿部ら	35	男	心窩部不快感	後腹膜腫瘍	7×5 cm	腫瘍摘除術
13	1986	清水ら	70	女	左季肋部痛	後腹膜腫瘍	14×15×1.5 cm, 1,800 g	腫瘍摘除術
14	1987	西村ら	66	男		無機能性副腎癌		腫瘍摘除術
15	1988	五島ら	53	男		後腹膜腫瘍	9.5×6.0×5.5 cm, 170 g	腫瘍摘除術
16	1988	米沢ら	4	女	右側腹部、単径部膨隆、右足跛行、皮疹	後腹膜血管腫	10×3×3 cm, 6×3×2.5 cm 4×3×2 cm, 110 g	腫瘍部分切除術
17	1988	樋之津ら	57	男	頭痛、嘔気、嘔吐	異所性褐色細胞腫	記載なし	腫瘍摘除術
18	1989	小倉ら	73	男	腹部不快感	後腹膜血腫	2.3×14×9 cm, 370 g	腫瘍摘除術、左腎合併摘除
19	1990	自験例	55	男		副腎海綿状血管腫	10×9×9 cm, 800 g	腫瘍摘除術 摘脾、横隔膜、胸壁合併切除

本疾患の超音波像について阿部ら<sup>5)</sup>は、海綿状構造内に結合組織が島状に散在し、また周囲臓器の音響学的効果に加わるため、肝と同程度のエコーレベルで内部は不均一な超音波像を呈すると報告しており、自験例でも同様の所見であった。超音波検査を行った6例の内4例では内部不均一、2例では嚢胞状であった。CT検査を行った8例の内自験例を含む4例では内部に石灰化を認めたが、これは海綿状血管腫の内部で繰り返し出血が起こり、小血栓が器質化したものと考えられている。

肝海綿状血管腫の動脈造影では動脈相早期より静脈相にかけて造影剤の斑状の pooling を認めるのが特徴的であり、自験例でも同様の所見が得られたため術前に海綿状血管腫と診断しえた。しかし、動脈造影を行った7例の内5例では avascular であったため術前診断は後腹膜血腫または後腹膜腫瘍となっている。

腫瘍マーカーを含め血液、生化学的検査において本疾患に特徴的なものではなく、また画像診断は上記のごとくであるため術前に診断するのは容易ではなく、術前診断が後腹膜腫瘍となるものが大部分である。悪性が否定しきれないこと、後腹膜血管腫には rupture の可能性があることより外科的治療の適応となる。放射線療法<sup>6)</sup>、ステロイド投与<sup>7)</sup>、腫瘍塞栓術<sup>8)</sup>により後腹膜血管腫が縮小あるいは消失を示した報告もあるが、本邦報告19例の内腫瘍を完全摘除した症例では再発を認めていないことより、腫瘍摘除術が第一選択であると考えられる。腫瘍残存例および摘除不能例では放射線療法、ステロイド投与、腫瘍塞栓術も考慮に入れるべきであると考えられる。本邦報告例では腫瘍部分切除術を行わざるをえなかったのは1例のみであり、癒着のため周囲組織を合併摘除したのは自験例を含め3例で、14例では比較的容易に腫瘍を完全摘除している。

自験例では術後肺合併症などなく術後36日目略治退院。術後7ヵ月を経た現在再発を認めない。

## 結 語

55歳男性の後腹膜海綿状血管腫の1例を報告するとともに若干の文献的考察を行った。

なお、本論文の要旨は、第130回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

## 文 献

- 1) Pack GT and Tabah EJ: Primary retroperitoneal tumors, a study of 120 cases. *Int Abst Surg* **99**: 209-231, 1954
- 2) 天野正道: 後腹膜類皮嚢腫の1例. *西日泌尿* **37**: 734-741, 1975
- 3) 遠藤 健, 豊島 宏, 武村民子: 急性腹痛を呈した巨大後腹膜血管腫の1例. *臨外* **37**: 1583-1587, 1982
- 4) 小倉泰伸, 菅谷公男, 松崎 章, ほか: 後腹膜海綿状血管腫の1例. *西日泌尿* **51**: 1641-1643, 1989
- 5) 阿部真秀, 小野寺博義, 太田 恵, ほか: 後腹膜海綿状血管腫の1例. *臨放* **29**: 1131-1134, 1984
- 6) Frank RT: Hemangioma of the pelvic connective tissue. *Am J Obstet Gynecol* **20**: 81-84, 1930
- 7) 沢田 淳, 高田 洋, 粕淵康郎, ほか: 後腹膜血管腫: 経口的ステロイドホルモン投与により消失した1例. *小児外科・内科* **4**: 1415-1419, 1972
- 8) 橋本真侍, 中川圭子, 見須英雄, ほか: Transcatheter embolization により著名な縮小をみた脾近傍の海綿状血管腫の1例. *臨放* **24**: 1511-1514, 1979

(Received on July 31, 1990)  
(Accepted on September 18, 1990)